

ヒッタイト語の使役機能を持つ接辞-nu-と通時的変化

大亦菜々恵

omata.linguistics1@gmail.com

キーワード: ヒッタイト語 使役接辞 通時的変化 自他交替 labile
basic valence orientation

要旨

ヒッタイト語には形容詞や動詞につく-nu-という動詞派生接辞が存在し、機能は使役であると説明されてきた。しかし語基が他動詞の場合は語基と-nu-派生語の意味が全く同じに見えるなどして-nu-の機能は判然とせず、先行研究ではその機能が明らかになっていなかった。

本稿は先行研究では考慮されてこなかった通時的変化に着目しながら、辞書を用いた調査によって、語基に他動詞用法がある-nu-派生語を中心に再検討をする。まず語基と-nu-派生語の意味が全く同じになる例があることを確認し、それらの多くは語基が自他同形 (labile) であることを明らかにする。そして古期ヒッタイト語では自他同形であった動詞に、中期以降他動詞であることを明示するために-nu-をつけるようになったという主張をする。

Luraghi (2012) によってヒッタイト語の自他交替は使役型、逆使役型が多いことは知られていたが、labile の動詞の存在は知られていなかった。本稿では古期で labile であった動詞対が中期以降使役型に変化する現象が明らかになるが、この自他交替のパターンの変化はヒッタイト語の他動性表示の通時的変化を示唆していると考えられる。

1. 序論

1.1 はじめに

ヒッタイト語には名詞や形容詞、動詞につく-nu-という動詞派生接辞が存在する。この接辞の機能は factitive もしくは causative であるとおおまかに説明されてきたが、とくに他動詞につくと、語基の動詞と派生語が全く同じになるなどして、-nu-という接辞の機能を捉えることが難しい場合がある。先行研究の Kronasser (1966) はこのような-nu-使役接辞を全く意味なく付けられたものと扱っている一方、Luraghi (1993) は意味なく付けられるのはおかしいので微妙な意味変化があると主張しており、-nu-の解釈には様々な議論がなされてきた。

本研究ではまず、他動詞に-nu-派生接辞がついた場合を中心に再考し、Kronasser (1966) が主張するような、-nu-接辞が意味変化をもたらさずに使用されている例が確かにあることを検証したい。さらに、意味変化がないのならなぜ-nu-がつけられるのかについて、先行研究では考慮されてこなかった通時的変化に注目しながら考察する。

1.2 ヒッタイト語と-nu-使役接辞について

ヒッタイト語は紀元前1600年から1200年までの約400年間アナトリア地方(現在のトルコ)で使用された、文証されている中で最古の印欧語であり、アナトリア諸語に属する。文証されている400年の間に文法や語法がかなり変化していることから時代区分がなされており、古期ヒッタイト語(OH: Old Hittite)、中期ヒッタイト語(MH: Middle Hittite)、新期ヒッタイト語(NH: New Hittite)と分けられている。同様に文書もOS(Old Hittite Script)、MS、NSに区別される。

ヒッタイト語の動詞は人称(1, 2, 3人称)、数(単数, 複数)、法(直接法, 命令法)、時制(現在, 過去)、態(能動態, 中受動態)に従って活用する。さらに動詞は二つのクラスに分けられてそれぞれmi-活用とhi-活用をする。動詞から派生する形式としては分詞-ant-(状態をあらわし、自動詞では能動、他動詞では受動の意味になることが多い¹⁾、不定詞、目的分詞、動名詞がある。また、継続や反復などの非完了を表す接尾辞-ske-がある。分詞の-ant-と非完了の-ske-は後述するように状態や動作などの語彙的アスペクトによって分布や意味が影響される。

形容詞(と一部の名詞)と動詞には-nu-という動詞派生の接尾辞をつけることができる。-nu-は印欧祖語の*-new-/nu-に遡ることができる。この接辞はdāsnóti「捧げる、敬意を表する」(cf. dāšti「敬意を表する」)等ヴェーダ語に45例ほどあるが、接辞自体に共通の意味は見出されていない。またギリシャ語でὄρνομι「駆り立てる」などの同様の派生語がいくつか見られるが、生産性はなく、これも意味は変わらないとされている(Sihler 1995:501-502, LIV 2001:17-18, 713-714)。ヒッタイト語では-nu-は形容詞につくと「～にする」という意味になり factitive の機能を持ち、動詞につくと「～させる」という意味になり causative の機能をもつと伝統的に言われている。(factitive としては形容詞のみにつくもう一つの接尾辞-ahh-が存在し、形容詞に関しては-nu-よりもこちらのほうが多い。-nu-とは音韻的に相補分布をなす。)²⁾

- (1) a. harki- 「白い」
 b. harganu- 「白くする」
 c. hat- 「乾く」
 d. hatnu- 「乾かす」
 e. mema- 「話す」
 f. memianu- 「(誰かに) 話させる」

(1)a, bは形容詞に-nu-が付く場合、(1)c, dと(1)e, fは動詞(自動詞)に-nu-が付く場合の例である。先行研究では形容詞につくと factitive、動詞につくと causative と言われてきたが、(1)c, dのように語基が状態変化動詞の場合などは-nu-がつくと「～にする」という意味になり、形容詞についたときと働きは同じである。‘causative’という用語は、意味的には(1)e, fのような例を想定して使われているものと思われるが、本稿では factitive と causative を分けずにまとめて「使役」と呼ぶことにする。

¹ Dardano (2014) はヒッタイト語の-ant-分詞の態についての研究である。

² Hoffner and Melchert (2008: 175-179) (以下GHL)を参照。

-nu-のほかには使役の機能を持つ接辞として印欧祖語由来の-nin-という接中辞があり、hark-「死ぬ」> harnink-「滅ぼす」、ištark-「病気にかかる」> ištarnink-「病気にする」など-k-で終わる語の4例が確認されているが、-nu-のような生産性はない。

1.3 ヒッタイト語の表記について³

ヒッタイト語は粘土板の上に楔形文字で書かれているが、楔形文字には表音文字と表意文字が存在する。表音文字は音節文字であるため語中で3つ以上の子音連続をあらわすことができず、途中で母音aを挿入することがある。さらに、閉鎖音は文字の上で無声と有声の区別がなく、例えばコンピュータの3人称単数命令形はe-es-tuともe-es-duとも綴られることがある。これらの書記上の理由によって、(1)bのharganu-はharknu-という読みが想定され、hark-に直接-nu-がついた形と考えることができる。

(2)	takku	LÚ.U ₁₉ .LU-an	ELLAM	kuisi ...
	もし	人.ACC	自由な	誰か.NOM
	ZU ₉ -ŠU	lāki		
	歯-彼の	叩き割る.3SG.PRES		
	「もし誰かが自由民の歯を叩き折ったら」			(OH, 法典, KBo 6.2 i 9)

また、ヒッタイト語はシュメール語由来の表意文字も用いられる。シュメール語は大文字で書かれる。さらに音節文字によって表されるアッカド語由来の単語も用いられ、これは斜体の大文字で書かれる。これらはヒッタイト語の文で頻繁に出てくるが、発音する際にはどちらもヒッタイト語で読まれていたと考えられており、(2)のLÚ.U₁₉.LU「人」もヒッタイト語のantuhša-と読まれていたはずである。また、表音文字はLÚ.U₁₉.LUのようにそのままでも用いられるが、LÚ.U₁₉.LU-anのように語幹(antuhša-)を表意文字(LÚ.U₁₉.LU)で、屈折語尾を-anで表すこともできる。この場合のハイフン(-)は文字の境界を示し、接辞の境界を示すものではない。

2. 先行研究

2.1 使役接辞-nu-に関する先行研究

本節ではヒッタイト文献学における使役接辞-nu-に関する先行研究を扱う。まず、-nu-という接尾辞が使役の機能を果たしていることは、印欧祖語ですでに*-new-/nu-が再建されていたため、ヒッタイト語が解読されて早い段階で認識されていた。Luraghi (1993:164)によれば最初に-nu-という接尾辞の機能が整った形で記述されたのはSturtevant (1933)である。その後Neu (1968b:53)は-nu-が特にmedia tantum(中受動態の活用しかせず能動態の活用をもたない動詞。es-「座る」、kis-「～になる」など)の自動詞から能動の他動詞を形成する機能を持つことを明らかにした。しかし、この研究は中受動態に関するものであるため、-nu-に関してはそれ以上深く踏み込んでいない。また、Kronasser (1966:451-452)では-nu-の様々な機能について分析

³ GHIL: 10-24

しており、その中で-nu-がついても元の動詞と意味が変わらないものを *Übercharakterisierung* (過剰特徴づけ) としてまとめ、それらが他動詞から派生したものであることを指摘している。

Luraghi (1993) は彼女が知る限りの-nu-派生動詞 99 個の一覧を作成し、派生の語基の性質に従って分類し、分析を行っている。彼女の分類のなかでは 99 個のうち 18 個は形容詞・名詞からの派生、14 個は他動詞からの派生であり、残りのうち 56 個は自動詞からの派生とされている (派生の語基や意味が不明なものが 10 個ある)。本稿で後に重要になる、自動詞と他動詞両方の用法を持つ動詞が存在する可能性は考慮されていない。-nu-の機能は語基となる動詞に(a) コントロールとダイナミックの性質を与えること、(b) 結合価を増やすこと、(c) 使役を意味することであり、これらが組み合わさっているとされている。自動詞に働きかけるのが主な機能であり、自動詞 (特に状態動詞、状態変化動詞) につくと意味の変化が明らかであるのに対し、他動詞につくと意味の変化は複雑になり、他動詞についた場合の-nu-の機能は以下の 4 種に分けられるとしている。

(i) 使役の意味とともに 3 価の他動詞になる

(3) a. *zai-* 「～を渡る」

b. *zinu-* 「～を～に渡らせる」

c. *takku LÚ-as GUD-ŠU ÍD-an zīnuskizzi*
 もし 人.NOM 牛(ACC)-彼の 川.ACC 渡らせる.3SG.PRES.ITER
 「もし人が牛に川を渡らせたなら」 (OH, 法典, KBo 6.2 ii 30)

d. *taknas=at ^dUTU-as KASKAL-an paiddu*
 地.GEN=それ.NOM(-ACC) 太陽神.GEN 道.ACC 行く.3SG 命令
 「それ (ここでは邪悪) が地の太陽神の道を行くように」
 (MH, 神話, KUB 17.10 iv13)

ただし、Luraghi (1993:166) によればこのような対格を二つとり結合価が 3 になるような用例は (3)c の一つしかなく、また Luraghi (1986:26-28)、van den Hout (1993:275) によればそもそもヒッタイト語は参与者が三つになるような構文は極めて限られているため、非常に例外的な用例であることも指摘されている。(3)c はヒッタイト語において使役の話題になると必ずでてくる用例であるが、GHL:247 でなされている“Double accusatives ... are particularly common with verbs which are causatives of transitive verbs” (二重対格は…他動詞の使役形の動詞に特によく見られる) という記述は(3)c という 1 例にのみ基づいてなされており、誤りであると Luraghi (2010:148) によって述べられている。

この例について思い出されるのは、ヒッタイト語には対格の絶対的 (副詞的) 用法として「行く」などの自動詞とともに用いて経路を示す *accusative of the way* (GHL:249) というものがあることである。(3)d では *pai-* という動詞は通常自動詞として用いられ対格をとらないが、KASKAL-an という対格が経路の意味を伴って表れている。このような場合 *pai-* は他動詞として用いられているとは考えずに KASKAL-an という対格名詞が副詞的に用いられていると分析される。同様に、(3)c の対格名詞 *ÍD-an* も移動する際の経路をあらわしているため、副詞的な用法である。語基の *zai-* は、対格名詞として *ÍD-an* を取る例しか見つかっていないので、自動詞

でき、その形式は使役型、逆使役型、無指向 (non-directed) 型に分けられ、さらに無指向型は不安定型、中立(両極)型、補充形に分けられるとされている。

(7) a. 使役型

起動動詞が無標で、使役動詞が有標のタイプ。ヒッタイト語の *hat-*「乾く」/ *hatnu-*「乾かす」など。

b. 逆使役型

使役動詞が無標で、起動動詞が有標のタイプ。ドイツ語の *ändern*「変える(他動詞)」/ *sich ändern*「変わる(自動詞)」など。

c. 不安定型(無指向型)

起動動詞と使役動詞の形が変わらないタイプ。自他同形。英語の *break*, *melt*, *open* など。

d. 中立(両極)型(無指向型)

起動動詞も使役動詞も有標性が同じタイプ。英語の *fall/fell* や、日本語の *atsum-eru*(集める)/ *atsum-aru*(集まる)など。

e. 補充形(無指向型)

起動動詞と使役動詞で全く異なる単語を用いるもの。補充法。英語の *die/kill* など。

Luraghi (2010:143-147, 2012) はヒッタイト語の自他交替に関する論文で、ヒッタイト語は-*nu*-の接辞による使役型の交替が多く、MH 以降は *voice* の交替による逆使役型が増えてくることを明らかにしている。分析する動詞はどちらも数十語で、*labile* である動詞対は *parkiya-*「大きくなる、大きくする」のみが挙げられている。また NH において使役もしくは逆使役の交替を見せる動詞対のなかには、OH では対になる片方が見つからず、自他交替が *labile* であった可能性のものが *pars-*「壊す」、*zinna-*「終える」などいくつかあることを指摘している (Luraghi 2010:144-146)。*parkiya-*、*pars-*については4節で詳しく分析する。

2.3 ヒッタイト語の中受動態

ヒッタイト語の動詞には形態的に能動態と中受動態があるが、能動態は能動の状況のみを表すのに対して、中受動態は能動、中動、受動のすべての態をあらゆる可能性がある。ただし、受け身はコンピュータにあたる *es-*という動詞と分詞を組み合わせる迂言的に表すことのほうが中受動態を用いることよりも多い。中動は再帰や相互を意味しており、再帰の例をあげると、*nai-*という動詞は能動態の形で「(何かを)まわす」という他動詞になり、中受動態で用いると「(自分が)まわる」という意味の自動詞になる。これは2.2節で見た自他交代の逆使役にあたる。また主語が複数の場合、相互の動作を表すことがあり、*zahhiya-*という動詞は「(お互いに)戦う」という意味になる (GHL:302-305)。

一方、印欧祖語の能動態と中動態の対立は *voice* の対立を表していたのではなく、動作動詞と状態動詞(一部状態変化動詞を含む)の対立を表していたとする説がある。Neu (1968a, 1968b)、Luraghi (2010) は、ヒッタイト語は OH の時代で能動態と中受動態の両方が文証されている動詞はまれであり、ほとんどの動詞は *media tantum* か *activa tantum* のどちらかに属していたと主張している。また、中受動態の活用をする動詞のほとんどは *deponent* (能動態の形式をとらな

いのに能動の意味になるもの)であり、状態動詞(もしくは状態変化動詞)であったとしている。(ただし、状態動詞であるが能動の活用をする動詞も存在した。)その後、NH へと時代が下るにつれて動作動詞も中受動態の活用をするようになり、再帰や受動などの機能を獲得していったという主張がなされている。

Neu (1968a:52) は元々 *media tantum* であった動詞のリストをあげている。

(8) *media tantum* の動詞

1. <i>ā-</i>	「暖かい」	8. <i>kist-</i>	「出て行く、消える」
2. <i>ar-</i>	「立っている」	9. <i>puga-</i>	「嫌われている」
3. <i>es-</i>	「座る」	10. <i>tarra-</i>	「～できる」
4. <i>iya-</i>	「歩く」	11. <i>tuga-</i>	「見える」
5. <i>isduwa-</i>	「知る」	12. <i>war-</i>	「燃える」
6. <i>ki-</i>	「横たわる」	13. <i>ze-</i>	「料理される」
7. <i>kis-</i>	「起こる」「なる」		

Neu は(8)のうち 1, 2, 3, 4, 6, 10, 11, 13 が‘stative’ (状態動詞) であるとのべているが、後の研究で 3 の *es-* は‘change of state’ (状態変化動詞) であることが指摘されている (GHL:362, Luraghi 2012:14 等)。残りの動詞は状態変化動詞であり、数例の例外はあるものの、おおむね *media tantum* の動詞は状態や状態変化などの *uncontrolled event* を表し、能動態の動詞は *controlled event* を表すという対立が見られる。特に状態動詞に関しては能動態で表されるのは *huis-* 「生きる」のみであり、そのほかは *media tantum* である。これらのことから中受動態の主な意味は状態動詞を含む非意志的動作であり、時代が下るにつれ受動や再帰などの *voice* の変化や結合価の減少と関わりを持つようになったとされている (Luraghi 2012:21)。

2.4 語彙的アスペクトと接辞

ヒッタイト語には 1.2 節でも述べたように継続や反復などの非完了を表す接尾辞-*ske-*が存在するが、語基にすでに非完了アスペクトが内在されている動詞とは共起しないことが明らかになっている (GHL:318)。例えば、*sakk-* 「知っている」、*ar-* 「立っている」などの状態動詞、接辞-*e-*による状態をあらわす名詞・形容詞由来派生動詞、接辞-*ess-*による「～になる」の意味をあらわす名詞・形容詞由来派生動詞などは-*ske-*と共起しない。-*ske-*の形が見られないことは、その動詞が非完了アスペクトを持っていることの一つの根拠になる。

また、分詞-*ant-*は先述したように状態をあらわし、自動詞では能動、他動詞では受動の意味になりどちらの場合も完了アスペクトをもつことが多い。しかし状態動詞につく場合は状態をあらわす。*ar-* 「立っている」につく場合は *aranja* 「立っている (～)」、*es-* 「～である、いる (*be*)」につく場合は *asanza* 「存在する～、～である～ (*being*)」となり完了性はないが、状態変化動詞の *ak-* 「死ぬ」につくと *akkanza* 「死んだ」となり、「死にかけている」のような状態の意味にはならない。また、他動詞の場合も *ep-* 「捕まえる」につくと *appanza* 「捕らえられた」となって完了アスペクトが現れる (Luraghi 2012:15)。

3. 「他動詞につく-nu-」の再考

本節では他動詞に-nu-がついた場合の再考を行う。先行研究の Luraghi (1993) は-nu-派生動詞の一覧を作り語基の性質によって分類したことで-nu-という接辞の全体像を把握することに大きく貢献しているが、問題点もいくつかある。まず、多義の動詞や様々な用法を持つ動詞について、代表的な意味や用法しかとりあげておらず、-nu-をつけた際の意味の変化が正しくとらえられていない可能性がある。また、意味や用法の通時的変化を考慮していないことや、他動詞についた時の-nu-の機能は4つあるとしているが、どういう場合にそれぞれの機能がでるかといった分析がないという不十分さもある。本節の分析では通時的変化を捉えるためにそれぞれの語の初出年代を考慮しつつ、一つの語にも様々な用法があることに注目していきたい。さらに、Kronasser (1966) の研究で過剰特徴付けとされている単語は多いが、Luraghi は-nu-が意味変化をもたらさないで使用されているのは不自然であると考え、他動詞に-nu-がついた場合の機能を大きくとりあげたようである。-nu-が何の意味変化ももたらさないように見える場合は何故-nu-がつけられるようになったのかについても考察したい。

この節では Luraghi (1993) にあげられている他動詞からの派生語 10 個⁵について再考する。ヒットイト語の用例が網羅的に掲載されている辞書のうち、完成しているものは未だないが、語頭が A~H で始まる語は Friedrich (1975) (HW²)、L~S は Güterbock (1989) (CHD) で調べることができる。また、用例は少なくなるが、A~S から始まる語は Puhvel (1983) (HED) で、A~T から始まる語は Tischler (1977) (HEG) で調べることができる。その他、完成している語源辞典 Kloekhorst (2008) や Friedrich (1952) で意味や初出年代を補う。次にあげる(9)のリストのうち、a, b は HW²、c~e は HED、f~h は CHD、i, j は HEG を参照した。例文は特に言及していない場合はそれぞれの参照した辞書から引用したものである。カッコ内のローマ数字は 2.1 節で述べた Luraghi (1993) での分類である。

- (9) a. asesanu-(NH~/) ases-(OH~/) (iv)
 b. hassanu-(NH~/) has(s)-(OH~/) (ii)
 c. gankanu-(NH~/) kank(a)-(OH~/) (ii)
 d. karpanu-(NH~/) kar(a)p-(OH~/) (ii)
 e. karsanu-(NH~/) kar(a)s-(OH~/) (iv)
 f. laknu-(MH~/) lak-(OH~/)(分類なし)
 g. pahsanu-(OH~/) pahs-(OH~/) (iv)
 h. parhanu-(MH~/) parh-(OH~/) (iii)
 i. taruppiyanu-(NH~/) tarupp-(OH~/) (iii)
 j. tekkussanu-(NH~/) tekkussai-(OH~/) (ii)

まずわかることは、10 個の語基はすべて OH で文証されていることである。そして-nu-による派生語のなかで OH から文証されているのは g の pahsanu-のみであり、他の派生動詞はすべ

⁵ Luraghi (1993) では他に annanu-/anniya-, dammeshanu-/dammeshai-, tittanu-/dai-, zinu-/zai- という動詞対も他動詞からの派生語としてあげられていたが、うち annanu-と tittanu-は語基が anniya-, dai-である確証がないため、ここでは扱わない。また、dammeshanu-「罰する」の語基は dammeshai-「破壊する」ではなく、名詞 dammeshā-「破壊、罰」であると考えられる。zinu-/zai-に関しては 2.1 節でも述べたとおり zai-は自動詞であると思われる。

てMH以降にしかみられないことがわかった。OHの文書は量がNHの文書に比べて圧倒的に少ないため、OHで文証されていないからといって存在しなかったと言い切ることはできない。しかし少なくとも *pahsanu-* という形はOHからかなりの数が文証されているため、頻度を考えても他の-nu-派生語に比べると際立って多いといえることができる。以下、これらの語と使役の派生形について例文も交えながら考察をしたい。

3.1 *asesanu-*(NH~/) *ases-*(OH~/) (iv)

a. *asesanu-*「座らせる」/*ases-*「座らせる」については、Luraghi (1993:168-169) で過剰特徴付けとして分析されていたとおり、*ases-*「座らせる」自体が *es-*「座る」という動詞に対応する使役動詞である。辞書 (HW² A:385) によればNHの始まりにあたるムルシリ二世の時代で *es-*「座る」と *ases-*「座らせる」が混同され始め、*ases-*が「座る」という意味で自動詞としても使われるようになったので、新たに *asesanu-* という語ができたようである。*asesanu-* はムルシリ二世以降の文書にしか見られないとされている⁶。

- | | | | | |
|------|----|--|--------------------------|---|
| (10) | a. | <i>partaunit=us</i>
翼.INST=PN.ACC.PL | <i>LUGAL-un</i>
王.ACC | <i>MUNUS.LUGAL-ann=a</i>
王妃.ACC=CONN |
| | | asaskizzi
座らせる.3SG.PRES.ITER | | |
| | | 「彼(女)は翼で彼ら、王と王妃を何度も座らせる。」 (OH, 儀礼, KBo 17.1 i 6) | | |
| | b. | <i>LUGAL-i</i>
王.D-L | <i>peran</i>
~の前.POST | asesanzi
座る.3PL.PRES |
| | | 「彼らは王の前へ座る。」 (NH, KILLAM 祭, KBo10.26 i 42) | | |
| | c. | <i>ix ALAM LUGAL šA</i>
像 王 ~の.PREP | <i>GIŠ</i>
木 | asisanuanzi
置く・座らせる.3PL.PRES |
| | | 「彼らは木でできた王の像を置く(座らせる)。」 (NH, 儀礼, KUB 43.49 rev.10) | | |

(10)aはOHからの例で、「彼ら」と「王と王妃」は同格でいずれも対格であり、*ases-*が明らかに対格をとり「~を座らせる」という意味の他動詞であることがわかる。一方(10)bはNHからの例で、対格をとらず「座る」という自動詞である。OHには(10)bのような自動詞用法は見られず、豊音形でない *es-* がその役割を担っていたが、NHで *ases-* が他動詞用法も自動詞用法も持つようになっていったことがわかる。そして-nu-の使役の派生形は(10)cのように「~を置く、座らせる」といった他動詞用法のみを持つ。このことから、-nu-の使役の派生形は *ases-* が他動詞、自動詞の両方の用法を得てしまい自他同形になったため、他動詞であることを明示するため現れた可能性がある。

3.2 *karsanu-*(NH~/) *kar(a)s-* (OH~/) (iv)

e. *karsanu-/kar(a)s-* については、語基となる *kar(a)s-* には(a)「切る」(b)「離す、分離する」(c)「止める」の意味があり、とくに(c)「止める」の意味で使う場合は中受動態のことが多く、自動詞

⁶ HW²はKammenhuberによる粘土板の時期決定に従っているが、批判も存在するため、全用例にあたって再考する必要がある(佐久間保彦, p.c.)。今後の調査の課題としたい。

としても他動詞としても使われる。また-nu-のついた派生形はNHのみに見られ、他動詞で「～を止める」の意味になる。(HED K:100)

- (11) a. nu ANA DINGIR.MEŠ BĒ[LŪ.MEŠ-YA NINDA]harsis]
 CONJ ~へ.PREP 神.PL 主人.PL=私の パン.NOM
 ispantuzzi karastari
 神酒.NOM 止まる.3SG.PRES.M-P
 「我が主人、神々へのパンと神酒は止まる(だろう)。」

(NH, 祈祷, KUB 14.12 rev. 9-10)

- b. namma GIŠ INBI.HI.A karappiyan[zi] nu mān hameshanza
 そして 果物.PL とる.3PL.PRES CONJ もし 夏.NOM
 n=at miyan karasanda
 CONJ=それ.SG.(NOM-)ACC 熟れた.(NOM-)ACC 切る.3PL.PRES.M-P
 「そして彼らは果物をとる。もし夏(になったら)、彼らは熟れたそれ(果物)を切り取る(だろう)。」

(NH, 祭式, KUB 27.16 i 9-11)

- c. nu=ta EZ[EN₄.ME]Š karsanunun
 CONJ=あなた.D-L 祭り.PL やめる.1SG.PRET
 「私はあなたのところでの祭りを取りやめた。」

(NH, 祈祷, KBo 12.58 + KBo13.162 obv.3)

(11)aでも(11)bでも動詞は中受動態の形をしているが、(11)aは対格目的語をとらず自動詞として用いられており、(11)bは-atという対格の人称代名詞をとる他動詞として使われている。このことから先行研究のKronasser (1966) とLuraghi (1993) では他動詞として分類されていたkar(a)s-が、中受動態という同じ態で他動詞としても自動詞としても用いられる自他同形の動詞であることがわかる。-nu-の機能に関してはKronasser (1966:452)ではÜbercharakterisierungとして扱われており、Luraghi (1993:168) では語基と派生形が変わらないとしながらも、意味が狭まるような変化をうけているとされていた。HEDの辞書を見る限り語基と-nu-の派生形のあいだに意味の差は全くみられないので、Kronasserの見解のほうが正しいと思われる。(11)にあげた例文はすべてNHのものであるが、-nu-はNH以降、自他同形であったkar(a)s-につくことで他動詞であることを明示するようになった可能性がある。

3.3 laknu-(MH~/) lak- (OH~/)(分類なし)

f. laknu-/lak-については、lak-には(a)「(歯を)叩き折る」(b)「(耳や目をどこかの方向へ)向ける」(c)「(柱などが)倒れる(中受動態で自動詞)」の用法がある。laknu-には「(柱、王座、机を)倒す」、「(耳や目を)向ける」などの他動詞の意味がある。CHD L-N:20にはlaknu-について、“Not yet attested in OS. In mngs. 1-6 MH/NH laknu- replaces OH active lak-; mid. lak- continues from OH throw NH.”と述べられている。

- (12) a. takku LŪ.U₁₉.LU-an ELLAM kuiski ...
 もし 人.ACC 自由な 誰か.NOM
 ZU₉-ŠU laki
 歯-彼の 叩き割る.3SG.PRES

「もし誰かが自由民の歯を叩き折ったら」 (OH, 法典, KBo 6.2 i 9)
 b. mⁿ=kan antuhsas lagāri nasma=as=kan
 もし=PTCL 人.NOM 倒れる.3SG.PRES.M-P もしくは=彼.NOM=PTCL
 G^{IS}GIGIR-az katta māuszi
 戦車.ABL 下に 落ちる.3SG.PRES
 「もし人が倒れた時、もしくは彼が戦車から落ちた時」

(NH, 粘土板目録, KUB 8.36 iii 9-10)

c. UR.GI₇=wa=kan ŠÀ É.DINGIR-LIM pait
 犬.NOM=PTCL=PTCL 中へ 神殿 行く.3SG.PRET
 nu=kan G^{IS}BANŠUR laknut
 CONJ=PTCL 机 倒す.3SG.PRET
 「犬が神殿の中に入ってきた。そして机を倒し(捧げるためのパンをばらまいた)。」

(NH, 占い, KUB 5.7 obv.24-25)

(12)aは「自由民の歯」という対格目的語をとっており、「倒す、折る」という意味の他動詞として用いられている例である。このようにlak-が他動詞として用いられるのはOHのみである。(12)bは対格目的語をとらず「倒れる」という意味の自動詞として働いており、この用法はOHからNHまで用例が確認されている。(12)cは-nu-の派生形で、MHから用例が確認されており、意味上lak-「倒れる」と対をなす他動詞である。先行研究ではlak-は他動詞として分類されていたものの用法が複雑なためかほとんど考察がなされていなかったが、OHのときには能動態で他動詞、中動態で自動詞を表す二つの用法を持つ動詞であったlak-がMHから他動詞用法を失い、自動詞として再解釈されて、-nu-の使役派生形が他動詞用法を担うようになったことがわかる。

3.4 pahsanu-(OH~)/ pahs-(OH~) (iv)

g. pahsanu-/pahs-に関してはどちらも「守る」という意味が主であり、使い方もほとんど変わらないと考えられてきた。しかし大きな違いとして、語基のpahs-には-ant-分詞の語形が見られず受身も作れないのに対し、pahsanu-には分詞の形が多くみられて受身でも完了でも数多く用いられることが挙げられる(CHD P:2-10)。2.4節で述べたように、-ant-分詞は状態動詞の場合状態の意味になって完了性をあらわさないの、受身や完了で用いられないことは語基が状態性をもつことを示唆する。また、pahs-はしばしば目的語をとるにもかかわらず状態動詞に多い中受動態の活用をすることを考えると、pahs-は「~を守っている」というような状態をあらわし、派生形のpahsanu-は動作をあらわしている可能性がある。その場合、-nu-は状態の動詞を動作動詞に変える役割を果たしていることになる。

(13) a. nu mⁿ kūš lingāus(!)⁷ pahhasduma
 CONJ もし これらの 誓い.ACC.PL 守る.2PL.PRES.M-P
 sumās=a DINGIR.MEŠ-es pahsanderu
 PN.2PL.ACC=CONN 神.PL.NOM 守る.3PL.IMP.M-P
 「もしあなた方がこれらの誓いを守るのならば、神々があなた方を守ってください」

⁷ 感嘆符 (!) は楔形文字のテキストが明らかに誤字・脱字であろうところを修正した箇所につけられる。ここでは li-in-ga-a-us となるはずのところは楔形文字では li-li-ga-a-us と書かれている。

ますよう。」

(MH/MS, 条約, KBo 8.35 ii 14-15)

b. n=asta mān [ŠÀ] É.DINGIR-LIM EZEN₄
 CONJ=PTCL もし 中で 神殿 祭り

nu IZI mekki **pahhasten**
 CONJ 炎 とても 守る.2SG.IMP

「もし神殿の中で祭りがあるなら、炎を特に（注意して）守りなさい。」

(MH/MS, 指南書, KUB 13.4 iii 45)

c. nu=tta LÚ.ME[Š URU^UKarkisa] anzid[a]z
 CONJ=PN.2SG.ACC 人々 Karkisa の街 PN.1PL.ABL

memiyanaz **PAP-nu-[ir]**
 契約.ABL 守る.3PL.PRES(=pahsnuir)

「Karkisa の街の人々は私達の契約に従ってあなたを守った。」

(NH, 条約, KUB 19.49 i 12-13)

d. n=[a]t QĀTAMMA **pahasnuan** ē[stu]
 CONJ=PN.NOM(-ACC) 同様に 守る.PTCP コピュラ.3SG.IMP

「同様にそれ（新生児）が守られるように。」

(MH?, 儀礼, KBo 17.63 rev.6b + KBo17.62 iv 11)

(13)a, b は語基の pahs-からの用例で、文脈としては動作的な「守る」としても状態的な「守っている」としても読むことができる。とくに(13)b は「炎」「邪悪なもの」などの危険物を外に漏らさないようにする、という文脈で、これは使役派生形の pahsnu-には見られない用法である。この場合瞬間的な動作として「守る」というよりは「漏らさないように保っている」といった状態的な状況である可能性が高く、pahs-が意味の上でも状態動詞であることの一つの根拠として考えることができる。状態動詞が目的語をとるということは通言語的にも珍しいことではなく、例えば英語では have, possess などの所有、lack 等の非所有、fit, resemble, suit 等二者の関係を表す状態動詞は目的語をとる。（これらは他動詞であるにもかかわらず受動態を作ることができないため状態動詞であると考えられる。She has a knife. 「彼女はナイフを持っている。」はナイフに影響が及んでいないため *A knife is had by her. とすることができない。ヒッタイト語でも pahs-は-ant-分詞がないため受動態が作れないが、同様の現象であろう。）「守る」は他の言語では状態動詞でないことのほうが多いが、ヒッタイト語では pahs-は「A が B の保護下におかれている」のような関係性を表す動詞であると解釈すれば、状態動詞であっても不思議ではない。一方、(15)c, d は-nu-の使役派生形であり、(13)c の「守る」は(13)a と同様の使われ方をしており意味の違いを捉えることは難しい。しかし、(13)d では-ant-分詞の形で受動構文を形成しており、pahsnu-は状態動詞ではないといえる。

さらに、自動詞に-nu をつけると通常結合価が一つ増えて他動詞になるが、そうでなく自動詞のままになる例が一つだけ存在する。その唯一の例である nuntarnu-は語基が状態を主に表し、-nu-派生形は動作であることが強くでているように見える。

(14)⁸ a. nunyarriya- ‘to hasten, be quick’ (from MH)b. [nu h]ūmanza **nuntarriddu**⁸意味・訳語は CHD L-N:474

CONJ	みんな. NOM	急ぐ. 3SG.IMP	
‘Let everyone be quick (about it)’		(MH, 指南書, KBo 16.25 i 5 + KBo 16.24 i 16)	
c. nuntarnu- ‘to hurry, hasten; to rush into something, to act rashly’ (NS)			
d. zig=a		lē	nuntarnusi
PN.2SG.NOM=CONN	禁止	早まって動く. 2SG.PRES	
‘You must not act rashly.’		(NH, 条約, KBo 5.4 obv. 31)	

(14)の例も-nuの機能は状態の動詞を動作動詞に変える役割を果たしているという説を支持するものである。

3.5 parhanu-(MH~/) parh-(OH~/) (iii)

h. parhanu-/parh- に関してCHD P:142-147を参照すると、parh-には他動詞で「～を追いかける」「～を追放する」「(国、街を)襲撃する」「(馬を)走らせる」、自動詞で「急ぐ」といった用法がある。parhanu-は「(馬を)走らせる」と訳され、Luraghi (1993:168) では-nu-をつけることによって馬術用語に特化するような意味の特殊化であるとされていた。parh-もparhanu-もMHのものであるキックリの馬術文書に用例が見られるが、とくに使役接辞-nu-がついた語形はこの文書に4例あるのみでほかでは見つかっていない。馬術用語に関しては、走行距離の対比などから歩法の術語の意味が明らかになっており、pennie-が「速歩をさせる」、parh-が「駢歩をさせる」(どちらも他動詞)である。現代の馬術の歩法には遅い順から常歩、速歩、軽速歩、駢歩、ギャロップがあるが、pennie-が用いられるときは比較的長距離のため、遅めの速歩であり、parh-は短距離のときに用いられるため早いスピードの駢歩であると考えられている (Starke 1995:33)。次の例(15)a, bは二つ連続する文であるが、(15)aは一日目の晩のトレーニングについて述べており、(15)bは全く同じトレーニングを四日目の晩にも行うという内容である。これは(15)bにyaという添加を表す前接語があることから全く同じ内容であることが表されているが、「駢歩させる」として(15)aではparhanuziという-nu-の派生形、(15)bではparhziという-nu-派生形ではない語形が用いられている。

(15) a.	namma=as	1-edani	MŪŠI	3 DANNA	pennai
	そして=彼ら(馬)を	1.D-L	夜	3DANNA(2700m)	速歩させる.3SG
	parhanuzi=ma=as			ANA	8 IKU
	駢歩させる.3SG=CONJ=彼ら(馬)を			D-L.PREP	8 IKU(72m)
	「そして彼は彼ら(馬)を一日目の晩に2700mの距離を速歩させる。72mの距離を駢歩させる。」				
	(MH, 馬術文書, KBo3.5 ii 55-56)				
b.	INA	4 MŪŠI=ya	3 DANNA	pennai	
	D-L.PREP	4 夜=も	3 DANNA	速歩させる.3SG.PRES	
	parhzi=ya			8 IKU	
	駢歩させる.3SG.PRES=も			8IKU	
	「四日目の夜も2700mの距離を速歩させる。そして72m駢歩させる。」 ⁹				
	(MH, 馬術文書, KBo3.5 ii 56-57)				

⁹ 訳は Kammenhuber (1961:93)、距離の単位については Starke (1995:21-22)を参照した。

その他の箇所でも *parhanu*-と *parh*-の意味の違いが感じられるような箇所はなく、この語に関しては *-nu*-をつけても全く意味が変化しないと言ってよい。また、Luraghi (1993)による先行研究では *-nu*-をつけることによって馬術用語に特化するような意味の特殊化があるとされていたが、*parh*-自体が「駆歩させる」という用法で非常に頻繁に用いられおり、*parhanu*-はキックリの馬術文書に4例見つかっているのみで馬術以外の他の用法がないことが確かめられないため、2.1節で述べたように意味の特殊化を実証することは難しい。

- (16) *nu=kan* *ANA* *LÚ.KÚR*
 CONJ=PTCL ~へ.PREP 敵
ĪSTU 1 ^{GIŠ}*GIGIR* *parranta* *parhas*
 ~と.PREP 1 戦車 ~をこえて.POST 駆ける.3SG.PRET
 「(彼は川の対岸に近づくと、) 彼は敵の方へ一つの戦車で (川を) こえて駆けて行った。」
 (NH, 報告書, KUB 31.20 iii 9-10 + KBo 16.36 iii 12-13)

(16)のように *parh*-は自動詞の用法があるので、他動詞であることを明示するために *-nu*-がつけられた可能性がある。同じ能動態で自他両方の用法を持つため、自他同形であると考えられる。「速歩させる」の *pennie*-には自動詞用法も *-nu*-の使役派生形も存在しないため、自動詞を持つか否かが *-nu*-の派生形の存在を左右していると思われる。

3.6 *taruppiyanu*-(NH~/)/ *tarupp*-(OH~/) (iii)

i. *taruppiyanu*-(NH~/)/ *tarupp*-(OH~/) の対に関しては、Kloekhorst (2008:850)で *tarupp*-は‘to collect, to unite, to plaid together; (midd.) to collect oneself, to be finished’, *taruppiyanu*-は‘to bring together, to collect’の意味であると解説されている。Luraghi (1993:168)では *taruppiyanu*-が金を集める場面で使用されているため、意味の特殊化であるとされていた。しかし、Kronasser (1966:449)が指摘しているとおり語基の *tarupp*-が中受動態で「(主語が) 集まる」という意味の自動詞として用いられるため、*-nu*-の派生形はそれに対応する他動詞として用いられていると考えたほうが良いと思われる。*tarupp*-の中受動態は能動態以上に NH でよく見られることも Kloekhorst (2008:851)で指摘されており、NH で *tarupp*-が他動詞としてより自動詞として頻繁に用いられるようになったため、他動性を明示するために *-nu*-の派生形が生まれた可能性がある。

3.7 被使役者を明示しない使役

残りの b. *hassanu*-/has(s)-「産ませる」/「産む」、c. *gankanu*-/kank(a)-「重さを量らせる」/「重さを量る」、d. *karpanu*-/kar(a)p-「引き抜かせる」/「引き抜く」、j. *tekkussanu*-/ *tekkussai*-「見せさせる」/「見せる」に関しては先行研究で (ii) 使役を表すタイプに分類されており、*-nu*-は被使役者を明示しない使役を表す接辞として働いているとされてきた。今回、辞書による調査では *hassanu*-/has(s)-以外の動詞に関して網羅的な用例にあたることができなかった。被使役者を明示しない使役と考えられてきた例の多くには、被使役者が存在するか等の点で複数の解釈があり、使役の意味の有無を考えるためにはさらなる調査が必要である。これらの動詞について

Hoffner のように「彼女」ととれば、語基の has(s)-の自動詞用法「出産する」に-nu-がついて、「(女に) 出産させる」となるため、Luraghi の考えるような「被使役者を明示しない使役」の例ではなくなる。この場合、語基の has(s)-は自動詞と他動詞の用法をもつが、自動詞用法の主語と他動詞用法の主語の意味役割が同じになるタイプのもので、2.2 節でとりあげたものや3節の他の動詞とは違い、‘labile’¹¹ではない。labile の例とは異なり、has(s)-の他動詞用法には自動詞用法を引き起こすような使役の意味がない。語基の自動詞用法に-nu-がついて使役の意味が追加されたとき、labile の他動詞用法には使役の意味があるので-nu-派生語と意味が同じになるが、hassanu-には has(s)-の他動詞用法にはない使役の意味が増えるので、意味が同じではなくなる。

また、「産婆」という意味の has(sa)nuppalla-という語は OH から用いられているが、hassanu-からの派生語であると考えられている。-nu-のない*has(sa)ppala-という形はないのは、has(s)-が「産む」、hassanu-が「産ませる」という意味の違いがあることを示唆していると考えられる。

3.8 分析のまとめ

3 節をまとめると、まず、10 個の語基はすべて OH で文証されている一方、-nu-による派生語のなかで OH から文証されているのは g の pahsanu-のみであり、他の派生動詞はすべて MH 以降にしかみられないことがわかった。-nu-をつけても意味の変化が現れないことがわかった他動詞 (a, e, f, h, i) は、語基となる動詞に中受動態による再帰だけでは説明できないような自動詞としての用法があったり((9)の a, e, h は自他同形であるといえる)、自動詞として再解釈されたり((9)の f, i)しており、MH 以降になって自動詞と他動詞を区別するために-nu-をつけるようになった可能性が高い。このことは特に lak-が OH では能動態で他動詞用法、中受動態で自動詞用法も持っていたがのちに自動詞であると再解釈され、他動詞は-nu-派生形にとって変わったことが明らかになっていることから裏付けられる。また、唯一 OH から-nu-の派生形がある pahs-に関しては他動詞ではあるが非動作動詞であり、動作動詞/状態動詞の区別を-nu-が担っていたと考えられる。被使役者を明示しない使役であると解釈されていたものに関しては様々な解釈が存在し、さらに調査する必要がある。

4. 自他同形の動詞と類型論的考察

今回、自他同形の動詞の存在に注意しながら、-nu-派生動詞一覧を新しく作成した。Luraghi (1993) にあげられていた一覧を元に、Tischler (2008) に掲載されている新たな語を追加し、CHD や HED、Kloekhorst (2008) を参照して分類を一部改変した。Tischler (2008) は語の用例はあげていないが、これまでに知られているほとんどの単語を列挙するものである。結果、-nu-派生

¹¹ ‘labile’の動詞は能格動詞とも呼ばれ、自動詞と他動詞の両方の用法を持つ動詞のうち、自動詞として用いた場合の主語と、他動詞として用いた場合の目的語との意味役割が同じものを指す(「ドアが開 (ひら) いた(自動詞)。」に対する「ジョンがドアを開 (ひら) いた (他動詞)。」など)。

動詞は全体で 114 個になり、他動詞用法を持つ動詞をまとめると 17 個になった。3 節で分析した 10 個以外の動詞を本節で分析し、最後に類型論的考察を加えたい。

4.1 自他同型(*labile*)の動詞

先行研究で自動詞として扱われていた次の 3 つの動詞は、他動詞としての用法もあることがわかった。2.2 節でも述べた通り *park-(parkiya-)* と *pars-* という動詞は Luraghi (2010:144-146) で自他同形である可能性が示唆されていたが、今回自動詞、他動詞両方の用例を実際に確認することができた。

- (18) a. *park-* 「持ち上げる、育てる (他動詞), 上に上がる、育つ (自動詞)」
(from OH)
b. *parkanu-* 「高くする、持ち上げる」 (from MH)
- (19) a. *pars-* 「壊す (他動詞、能動態・中受動態), 壊れる (自動詞、中受動態)」 (from OH)
b. *parsanu-* 「壊す」 (from NH)
- (20) a. *samesiya-* 「(何かを) 燻蒸のために燃やす (他動詞), 燻蒸のために燃える (自動詞、中受動態)」 (from OH)
b. *samesanu-* 「(何かを) 燃やす」 (from NH)

以下、(21)から(27)の用例は全て CHD を参照した。(18)の *park-* は次の(21)、(22)のような「上に上がる」「育つ」といった自動詞用法のみが注目されていたが、(23)のように「黒い大地を」という対格目的語をとって「持ち上げる」という意味を示す他動詞用法が見つかった。*-nu-* の使役派生形は(24)のように他動詞としてのみ用いられる。

- (21) *nu* *sankus* *alil* *mahhan* ***parkiyat***
CONJ *sanku.NOM* 花.NOM ~のように 育つ.3SG.PRET
tuell=a ŠA^dU ZI-KA *alil* ***paraktaru***
PN.2SG.GEN=CONN 天候神.GEN 魂-あなたの 花 育つ.3SG.IMP
「*sanku* の花が育つように、天候神であるあなたの魂も花のように育ちますように」
(OH/MS, 神話, KUB 33.68 ii 1-2)
- (22) *nakkīs(!)*¹²=*wa=kan* ^{id}[*Marass*]antaza ***parkiya***
名誉ある人.NOM=PTCL=PTCL *Marassanta* の河.ABL 登る.2SG.IMP
「名誉ある人よ、*Marassanta* の河から登ってきなさい」
(NH, 祈祷, KUB 36.89 obv.26)
- (23) [(*tagn*)]*as* ^dUTU-*us* *kāsa* LUGAL MUNUS.LUGAL
地.GEN 太陽神.NOM いま 王 王妃
GE₆-*in* KI-*an* ***parkiyantat***
黒い.ACC 地.ACC 持ち上げる.3PL.PRET
「地の太陽神よ、今王と王妃は黒い大地を持ち上げた (犠牲を穴に捧げて冥界の力を呼び起こしなだめる、ということ)」 (MH?/NS, 儀礼, KBo11.10 iii 10-11)
- (24) *n=an* ^{GIŠ}AN.ZA.GÀR GIM-*an* ***parganusu***
CONJ=PN.3SG.ACC 塔 ~のように 上げる.2SG.PRES
「あなたは彼を塔のように上げる」 (NH, 賛歌, KUB 24.7 ii 11)

¹² 感嘆符については脚注 7 を参照。

(19)の *pars-*は中受動態が他動詞でも自動詞でも使われることがわかった。(25)は同じ人の一連の動作の中の一部を描写した文であるが、「薄いパン」という目的語をとって「割る」という意味の他動詞として用いられている。一方(26)は同じ中受動態でも「彼」という主語が「壊れる」という自動詞として働いている例である。

- (25) *namma* 1 <(NINDA)>.SIG *parsiya*
 そして 1 薄いパン 割る.3SG.PRES.M-P
ser=a:ssan NINDA.Ì.E.DÉ.A *dāi*
 上に=CONN=PTCL 油のケーキ 置く.3SG.PRES
 「そして彼は薄いパンを割る。そして油のケーキを上置く」
 (MH/MS, 召喚儀礼, KUB 15.34 i 26)

- (26) *n=as=kan* *inanas* *ser* *arha*
 CONN=彼.NOM=PTCL 病.GEN せいで 完全に
parsiyaddaru
 壊れる.3SG.IMP.M-P
 「そして彼は病のせいで完全に壊れるように」 (MH/NS, 軍の宣誓, KBo 6.34 i 38)

(20)の *samesiya-*も「燃える」という自動詞用法のみが注目されていたが、(27)のように明らかな対格目的語をとる「燃やす」といった意味の他動詞用法が確認できた。

- (27) (私はあなたの頭上の火を消した。私は魔術師の頭上で燃やした。私は犬の臭いをあなたから取り去った。)
ŠA UR.GI₇=ma *salpas*(dupl.salpan) *UZU* UR.GI₇
 犬の=CONN 糞.PL.ACC(SG.ACC) 肉 犬
^{UZU}*GİR*.PAD.DU UR.GI₇=ya ***simisiyanun***(dupl.simesēnun)
 骨 犬=CONN 燃やす.1SG.PRET
 「私は犬の糞(腸の内容物?)、肉、骨を燃やした。」
 (NH, 儀礼, KUB 24.14 i 23-24, dupl. KUB 24.15 i 22-23)

これらは語基の動詞が自他同形であり、そのうちの他動詞の意味を-*nu-*をつけることによって明示していると考えられる。また、全て-*nu-*の派生形はNH以降にのみ見られる。

さらに、Tischler (2008)から、他動詞用法を持つ次の動詞も-*nu-*派生をすることがわかった。

- (28) a. *harra-*(OH~)「すりつぶす」「失われる、損なわれる(中受動態)」
 b. *harranu-*(MH~)「すりつぶす」
 (29) a. *huittiya-*(OH~)「引っ張る(他動詞)、行く(自動詞)」
 b. *huitanu-*(NH)「引っ張る」
 (30) a. *ispar-*(OH~)「撒き散らす」
 b. *isparnu-*(MH~?)「撒き散らす」
 (31) a. *istapp*(OH~)「閉じる、ふさぐ」
 b. (para)*istappinu-*(NH~)「閉じる」

(28)aの *harra-*はHW² H:263によれば「すりつぶす、細かくする」「失われる、悪くなる(中受動態)」といった用法があり、*harranu-*は「すりつぶす、小さくする」という意味で、*harra-*と全く同じ意味であるとされている。*harranu-*はMHのKBo. 6.34+ KUB 48.76の軍の宣誓文書にある3例しか確認されていない。「失われる、悪くなる(中受動態)」の用例が多いため他動

詞であることを明示している可能性はあるが、この文書では *harra*-のほうは使われていないため、この文書特有のものかもしれない。

(29)a の *huittiya*-は HW² H:672-681 によれば「引っ張る (他動詞)、行く (自動詞)」(‘ziehen’) の自他同形動詞である。 *huitanu*-は「引っ張る (他動詞)」であり、他動詞であることを明示するために-*nu*-をつける例であると考えられる。

(30)、(31)は網羅的な用例にあたることができず、さらなる調査が必要であるが、 HED I:441-447, 471-475 を見る限り語基には自動詞用法がなく、語基と派生語の意味は同じとされていた。

4.3 他動性の表示方法の変化

3 節と 4 節を合わせると、-*nu*-によって全く意味変化が起こらないことが確認できたものは 10 個あり、そのうち 6 個((9)a, e, h, (18), (19), (29))が自他同形、4 個((9)f, i, (20), (28))は中受動態で自動詞用法¹³を持つことがわかった。また、意味変化が見られないとき全ての語基は古期から存在し、全ての派生動詞は MH 以降にしか見られない。特に自他同形の動詞については、2.2 節で見た自他交替の類型論的研究の分類で言えば、OH で自他動詞対が *labile* であったのが、MH 以降は使役型になったとすることができるだろう。Luraghi (2010, 2012) はヒッタイト語の自他交替を類型論的に扱った論文であるが、2.2 節でも述べたようにヒッタイト語は基本的に強い使役型であり、MH 以降逆使役が増えることを明らかにしていたものの、*labile* の自他動詞対については調査された単語の選び方が影響してかほとんど確認されていなかった。しかし、今回の調査の結果、OH において *labile* であった動詞は珍しくなく、その後 MH 以降-*nu*-使役接辞をつけることによって *labile* を解消するようになった可能性がでてきた。

今回の調査では-*nu*-の接辞がつく動詞のみしか扱わなかったが、Luraghi (2010) はヒッタイト語の自他動詞対のなかで、中受動態を用いて逆使役型を見せる *zinna*-「終える」などの動詞は、対になる他動詞が存在しないために OH では *labile* であった可能性があることを指摘しており、-*nu*-派生に関わりのない動詞も調査すれば *labile* の動詞の数は増えると思われる。

5. 結論

本研究ではヒッタイト語の使役接辞-*nu*-について、先行研究では考慮されてこなかった通時的変化に着目することで、その機能を明らかにするべく考察してきた。3 節ではまず、他動詞に-*nu*-使役接辞がついた場合を中心に再考し、この接辞が意味変化をもたらさずに使用されている例があることを確かめ、その多くは語基となる動詞が自他同形、もしくは中受動態で自動

¹³ 自動詞用法が中受動態になっているものについては、2.3 節を元に、意味的に *uncontrolled event* であるため中受動態になっていると考えると自他同形と言えるが、*voice* の交替による再帰とも考えることができ、その場合は逆使役型になるため、自他同形とは扱わないことにする。ただ 3.3 節と 3.6 節でも述べた様に、(9)f, i は MH 以降自動詞用法がほとんどで他動詞用法は-*nu*-派生形にとってかわられるため、語基が自動詞として捉えられる様に変化した可能性が高い。

詞用法を持つものであり、MH 以降になって自動詞と他動詞を区別するために-nu-をつけるようになった可能性が高いことがわかった。また、唯一 OH から-nu-の派生形がある paks-「守る」に関しては、他動詞ではあるが状態動詞であり、動作動詞／状態動詞の区別を-nu-が担っていた可能性がある。さらに4節と合わせた調査の結果、OHにおいて labile であった動詞対は珍しくなく、その後 MH 以降-nu-使役接辞をつけることによって labile を解消し、使役型に変化した可能性があることがわかった。

今回の調査では-nu-の派生について、通時的変化に着目し、一つの語にも様々な用法があることに注意して分析したことで、意味変化をもたらさず一見なんの役割も果たさないように思われていた-nu-の例にも、他動詞の明示という役割があり、その背後にはヒッタイト語の自他交替パターンの変化が関わっているという可能性を見出すことができた。辞書の制約で網羅的に用例にあたることができず、-nu-の機能を明らかにできなかった語もあったが、それらを中心に、今後さらに検討を重ねていきたい。

謝辞

本研究に際しまして、指導教員の小林正人准教授から、丁寧かつ熱心なご指導を賜りました。また、本研究室の佐久間保彦先生、中近東文化センターの吉田大輔先生からはヒッタイト語や文献学などについて様々なご指導をいただきました。東京外国語大学の長屋尚典先生からは使役の類型論などについてのご指導をいただき、本研究のテーマに興味を持つきっかけとなりました。京都大学の吉田和彦教授からは語源や音韻、文献などについて多くのご助言をいただきました。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。

略号

CHD = The Chicago Hittite Dictionary, CONJ = conjunction, CONN = connective particle, D-L = dative-locative, GHL = A Grammar of the Hittite Language, HED = Hittite Etymological Dictionary, HEG = Hethitisches Etymologisches Wörterbuch, HW² = Hethitisches Wörterbuch, ITER = iterative, KUB = Keilschrifturkunden aus Boghazköi, KBo = Keilschrifttexte aus Boghazköi, LIV 1998 = Lexikon der indogermanischen Verben, MH = middle Hittite, M-P = middle-passive, MS = middle Hittite script, NH = new Hittite, NS = new Hittite script, OH = old Hittite, OS = old Hittite script, PN = pronoun, POST = postposition, PREP = preposition, PRES = present, PRET = preterite, PTCL = particle (他は Leipzig Glossing Rules に依った。)

参考文献

Beckman, G. 1983. *Hittite Birth Rituals. Second Revised Edition. (Studien zu den Boğazköy-Texten. Heft. 29).* Wiesbaden: Harrassowitz.

- CHD = Güterbock, G., Hoffner, H., and Hout, Theo P. J. van den. 1989ff. *The Hittite Dictionary of the Oriental Institute of the University of Chicago*. Chicago: The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Comrie, B. 1985. Causative verb formation and other verb-deriving morphology. *Language typology and syntactic description*, vol.3, *Grammatical categories and the lexicon*, Cambridge: UP, 309-48.
- Dardano, P. 2014. Das hethitische Partizip – Eine Frage der Diathese? *Atti del 8th International Congress of Hittitology- Warsaw, September 5-9, 2011*, 236-262
- Friedrich, J. 1952. *Hethitisches Wörterbuch: Kurzgefaßte kritische Sammlung der Deutungen hethitischer Wörter*. 1st ed. Heidelberg: Winter.
- Haspelmath, M. 1993. More on the typology of inchoative/causative verb alternations. *Causatives and Transitivity*, edited by B. Comrie and M. Polinsky. Amsterdam & Philadelphia: Benjamins, 87–120.
- HED = Puhvel, J. 1983ff. *Hittite Etymological Dictionary*. Berlin, New York & Amsterdam: Mouton de Gruyter.
- HEG = Tischler, J. 1977ff. *Hethitisches Etymologisches Wörterbuch. (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft, Bd. 20)*. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- Hoffner, H. and Melchert, C. 2008. *A Grammar of the Hittite Language*. Winona Lake, IN: Eisenbrauns.
- Hout, Theo P. J. van den. 1993. Remarks on Some Hittite Double Accusative Constructions. *Per una grammatica ittita: Towards a Hittite Grammar*, edited by O. Carruba. Pavia: Iuculano, 275–304.
- HW² = Friedrich, J., Kammenhuber, A. and Hoffmann, I. 1975ff. *Hethitisches Wörterbuch*. 2nd ed. Indogermanische Bibliothek. 2. Reihe: Wörterbücher. Heidelberg: Winter.
- Kammenhuber, A. 1961. *Hippologia Hethitica*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Kloekhorst, A. 2008. *Etymological Dictionary of the Hittite Inherited Lexicon*. Leiden: Brill.
- Kronasser, H. 1966. *Etymologie der hethitischen Sprache*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- LIV 2001 = *Lexikon der indogermanischen Verben*. edited by H. Rix. Wiesbaden: Reichert.
- Luraghi S. 1986. Der semantische und funktionelle Bau des althethitischen Kasussystems. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung* 99, 23-42.
- _____. 1993. I verbi in *-nu-* e il loro valore causativo. *Per una grammatica ittita*, edited by O. Carruba, Pavia: Iuculano, 153–180.
- _____. 2010. Transitivity, intransitivity and voice in Hittite. *Indoeuropejskoe jazykoznanie i klassičeskaja filologija –XIV*, vol. 2, St. Petersburg: Nauka, 133–154.
- _____. 2012. Basic valency orientation and the middle voice in Hittite. *Studies in Language* 36:1, 1–32.
- Neu, E. 1968a. *Das hethitische Mediopassiv und seine indogermanischen Grundlagen*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Neu, E. 1968b. *Interpretationen der hethitischen mediopassiven Verbalformen*. Wiesbaden: Harrassowitz.

- Sihler, A. 1995. *New Comparative Grammar of Greek and Latin*. Oxford University Press.
- Starke, F. 1995. *Ausbildung und Training von Streitwagenpferden – Eine hippologisch orientierte Interpretation des Kikkuli-Testes*. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Sturtevant, E. H. 1933. Archaism in Hittite. *Language* 9, 1-11
- Tischler, J. 2008. *Hethitisches Handwörterbuch – Mit den Wortschatz der Nachbarsprachen. 2., vermehrte und verbesserte Auflage. (Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft, Bd. 128)*. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- Шацков, А. В. 2008. Хеттские глаголы с суффиксом -nu-. *Индоевропейское языкознание и классическая филология – XII*. Санкт-Петербург: Нестор-История, 471-474.

The ‘Causative’ Suffix *-nu-* in Hittite and its Historical Change

Nanae Omata

omata.linguistics1@gmail.com

Keywords: Hittite, causative suffix, historical change, labile, basic valence orientation

Hittite has a verbal derivational suffix *-nu-* attached to adjectives and verbs, which has been interpreted as a causative marker. However, when *-nu-* is suffixed to transitive verbs, it appears that there is no distinction between the meanings of the bases and those of their derivatives, and it is difficult to distinguish the function of the suffix *-nu-*.

This paper reexamines the derivatives whose bases function as transitive verbs focusing on the historical changes that have not been considered heretofore. First, it was found that in some cases the derivatives have identical meanings with their bases, and most of their bases function as both transitives and intransitives (labile). Based on the results, *-nu-* started to be suffixed to labile verbs after Middle Hittite in order to mark the transitivity clearly.

Luraghi (2012) showed that there are many causative and anticausative derivations in Hittite, but the existence of labile verbs has not been confirmed. This paper shows that verbs which was labile in Old Hittite became causative after MH, and this fact suggests a historical change in the marking of transitivity in the verbal system of Hittite.

(おおまた・ななえ 東京大学)